

昭和三十四年八月二十三日 第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一三七号）

慈

光

第十二卷

第八號

次

目

原 爆 十 五 年	近 角	常 觀	(1)
横 超 断 四 流 (二)	近 角	常 觀	(2)
常 觀 先 生 の 御 手 紙	福 島	政 雄	(10)
私 の 言 い た い こ と	近 角	真 觀	(12)
妙 好 人 を き ら つ た 源 左	辛 川	忠 雄	(14)
心 と 真 実	佐 藤	強 三 郎	(16)

原 爆 十 五 年

八月六日の広島、九日の長崎の原爆記念日も、第十五回目を迎えようとして居ります。一瞬にして十萬とも、廿萬とも称せられる犠牲者を出し、今日なお犠牲者の続いている日本こそ、心を一つにして、真剣にこの惨事の絶滅を、全世界に向つて徹底的に叫び、且実践に移さねばなりません。それは火に触れて火傷をした人は、他の子供が火に近づくのを見て、黙視しては居られないからであります。

顧るに、巨砲、大艦時代はすでに昔の夢となり、今や世界の武器は原水爆を中心に千変万化の様相を呈して居ります。そしてその製造に関共した科学者自体が、その威力の甚大さと、人類の滅亡を恐れて学者グループを組織して、その禁止に懸命の努力を続け、次々に声明を発表して居ります。その秘密の全貌を知る人々であるだけに哀情まことに切々たるものがあります。

さて今年日本の原爆に対する動きを聞きますと、その中心地の広島が原爆大会の指定地をこぼみ、東京での大会にはすでに警官の動員がされていると云うことであります。この大会には、万人が心を一つにして、貧富、貴賤を問はず、恩仇を超え、人種の如何、主義の如何を捨てて、この敵愾な事実に向わねばならないのに、これを斗争の具

に供されようとしている、悲しむべき動きが見られま

す。仏教では「獅子身中の虫」と昔から言われて居ります。それは百獸の王である獅子を倒すものは外には居ないけれど、その身中に巢喰う虫によつて倒される如く、仏教が仏教徒と称する内なる人々の乱れによつて崩れることを誠められた言葉であります。これをそのままここにあてはめることが出来ましょう。人類の平和、自由、解放と、高い理想を掲げながら、その科学の發達は月の世界にまで及んでいるのに、事家は理想に反して、人間が人間を亡しつづける。「薄氷上の舞」の危うさに直面して居ばます。

然しこれは独り日本の現状であるということだけでなく、私共自体がその渦中に、業を共にしているのではありません。そこにこの一大事に向つて純粹になりきれない自分自身の濁りと駄目さを痛感させられ、「我等愚痴の身にして、曠却よりこのかた流転せり」の善導大師の実語にふれ、自然に念仏が浮かぶのであります。それは濁りを濁りと知らぬで、真実に引き入れて融かして下さる、如来救済の妙用であります。この仏力に照護せられつづ、この惨事絶滅への歩みをたどらせて頂くことであります。

横 超 断 四 流 (二)

近 角 常 観

七 人 を 信 じ た の で あ つ て は 不 然 ならぬ

そこでここは私は露骨に言う。皆さんが法を聴かれるにしても、私なるものを頼りにして居られるのでは駄目なのである。勿論、いよ／＼お慈悲の頂けるまでは、私を頼りに聞いて下さる外、しよ／＼はしないのであるけれども、何時までも私を頼りにしてお出でになるのでは、必ず遣りぞけないが来る、とのことを申上げて置きたいのである。

それは本来私共は疑いの人間故、心の底には必ず浅ましい根性がある。故に私の身を見て下さるのであると、必ず突き当る時節が来るとの事を申上げて置きたいのであります。これは必ずしも私ばかりに限らぬ、人間は自分の親や子に対してでも、同様に悪しく思えるのである。故に『選択集』に於いては、「父母孝養をもつても往生の業とせぬ。奉事師長をもつても往生の業とせぬぞ」とお示し下された。又『歎異鈔』に於て

親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念仏申したることいまだそうらわず云々。

とあるのも、私共は出来る孝養をせぬというのでは無い。そういう私共であるから、仕度いにも、父母孝養が出来ぬのである。しかるに斯く仰せられた親鸞聖人が、第二章において

親鸞におきては唯念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の仔細なきなり。

善き人法然聖人の仰せであるから、弥陀の本願が信ぜられたかと思つと、なに全かさかさまである。聖人の説かれる弥陀の本願が信ぜられたから、法然聖人が信ぜられるとなつて来たのである。聖人の人格や、人となり有難いから法然聖人を信じて行く、というのでは『歎異鈔』は、一文の値打も無くなつてしまふのであります。

そうでない。私共は、今言う如く孝養父母も出来ぬのである、奉事師長も出来るならするが、虚仮雜毒のこの心では如何にしたつてすることが出来ぬ。しかるにその出来ざるして見ようなきさまを哀れみて、その者をこそ捨て置け

ぬとある南無阿弥陀仏の仰せである。

して見れば私共においては、唯もうこの南無阿弥陀仏ばかりが有難い。してその南無阿弥陀仏を知らせて下されたが、わが聖人にする時は、即ちよき人、法然聖人の仰せである。すれば広大なる本願の思し召しがそのまま法然聖人の口に現われて、即ち弥陀の直説である。即ち、この頂いた上からの「よき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり」であります。

さて今回は計らず、今の友人の名前まで言うて仕舞えば、私として此上なく有難く思わして頂くのであります。それほど多年、事を共にして居た友人を、私の方よりはかくまで悪しく隔てたに係わらず、その友人の方では、更に悪しく思うてくれなかつた。けれども私が思いがけなく信仰に入らして貰うたため、その友人はびつくりして、弥々俺は宗教界は駄目と、益々遠かるといふ風になつて居たのである。ところが今春、その友人は思いがけなく、愛児に先き立たれて、悲しみの余り、せつぱつまり、そのために不思議にもまた、このお見捨て無き御真実一つを頂いてくれたということになつて来たのである。即ち私としては、多年事を共にしていた親友と十幾年振りに、今度はいよいよ精神的に再会するを得たという訳である。斯く年少の頃より宗教の事につき相携えてやらして貰うた親友と、今

度は精神的に相結ばせて貰うを得たというは、何から何まで、不可思議の御導きであることを思わして貰う次第であります。

八 横ざまに四流を断す

そこで以上は私の苦しみた道行きに就き申し述べたのである。かくここに来ると、人間はどんな浅ましい心でも起して来るのである。そこになると彼の監獄の囚人がやることを、場合によつては必ずやるにきまつてるのである。ただそうなる業報が現存せぬからやらぬまでの事で、業報さえあれば、何時でも然うなれるように、私共は皆なつているのであります。処で今言う如く、それがいよ／＼最後に押し詰めて来ると、その人を不足に思い、悪しく考ふる五分五分根性が如何にしても止まらぬ。止まぬとすると自分の身は成り立たず、何ともしようがない。その仕ようの無い私の心中を、今横超の直道といふことは、即ち横合より親切な人が飛んで出て、その疑い、苦しむは如何にも汝の身にありては無理がない、如何にも我は同情する。故に如何程悪しくとも、我は決して不足とは思わぬぞ、そちらが五分五分でやるならば、我は何処までも無碍の心で向つてやる。そちらが三毒でやるならば、我は飽くまでも、

欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さ

ず、色声香味触の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染患痴無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽詭曲の心あることなし、和顔愛語にして、意を先にして承問す。(大無量寿経)

と、斯く飽くまでも私のして見ようなき心中に向つて、何処までもこれを融かきな措かぬとの慈悲心を以て、この広大な真実で向うて下さるが、これが仏の本願ということなのである。またそのお心が仏の無碍光ということなのであります。そこでこの広大の御真実で向われるのであればこそ、如何な五分五分の私も、この御真実の前には自ら頭が下り、満足して、ハタからばたく煩悩の根が断たれて仕舞うとなるのである。で即ち今までは

「人がよくしてくれるから斯うせねばならぬ」

「あゝすれば人が恨むから斯く／＼」

と、何処までもこれで悩むより仕方がなかつたのである。その者が一度、そのために、この遣る瀬無き御親切であることに腹ふくれて見ると、

「今まで自分の出来もせぬことを、こうも、あゝもと、あせつて居つたのが恐ろしき自分の間違いであつた」

との事が分つて来る。

この間も、或方が、親に孝行するに、何程心を運んでも親が満足してくれないとの事を歎かれた。私は申しに

「貴方は親に孝行が出来ると言うて居らるか。どれたけ骨折りても、親が満足してくれぬ処が、人生の業報という事なのである。然るにこの不完全の故に、永劫に敷きが止まないとの事をあわれみ思し召され、察するぞ、見捨てぬ、との仰せが、即ち父母孝養を以つては、往生の業とせぬとある広大のお慈悲にてましますのである。即ち自分で仕度くも、仕度い親孝行がする事が出来ぬ。その出来ぬ心の中を我は見えて居るぞ。その故に我は出て来たのであるぞ」

との広大のお慈悲でましますのである。すれば、今日まで出来ると思い、親孝行で立てると言うて居たのが、身の程知らずの間違いであつたのである。斯く孝行一つ出来ざる申し訳なき奴のために、斯程までの広大の思し召しとは、ここで人生の総てが断てるのである、とのことを申ししたのであつたのであります。

で、茲になると「斯うせねばならぬ」との事が、人生に・一として無くなつて来る。今まで人に不足を言い、自分が善く出来ると言うて居つたも、皆自分の間違いであつたことが、能く分つて来る。即ちかくあれもこれも、この不思議の仏意に腹脹るの一念、総てが断ち切れる処が、横超断四流なのであります。

で、ここになると、今までの五分々々を、思い懸けなき

お慈悲のため断たれて仕舞うのであるから、最早五分々々が続けられなくなつて来る。善いも悪いも、全体が皆、申訳なき誤りであつたとなつて来るのである。すると人間の義理まで離れて仕舞うのである如く思うは間違ひであるけれども、これまで最も心を悩ませた善し悪しの計らいが切れて、

「斯うせんならぬ」「あゝせんならぬ」

の問題が無くなつて来るのである。して「この何一つ当てにならぬ、自分も人も当てにならぬ、この頼り無き心中を知らし召し、そこが哀れのお慈悲でましませしか」と、この一念に円融、円満、頓極、頓速と、残る隅も無く、胸一杯にお慈悲が満ち渡り、今までの苦が転じて喜びと變りて仕舞うのである。

而して「自分は、徹頭徹尾罪惡の者、しかるにこの者を飽くまでお見捨て無き広大の思召しとは」と、もうこのお慈悲一つにされて仕舞うのであります。そこでここを『歎異鈔』の十四章には、

弥陀の光明に照らされまいらするゆえに、一念發起する
とき金剛の信心をたまわりぬれば、すでに定聚のくらしい
におさめしめたまいて命終すれば……。

即ちその時を以て、人生五分々の生命は終るのである。即ち「前念命終、後念即生」の味わいである。即ちかく一

幸右工門なる人の孫に当る方である。

私はこの話を先年、幸吉氏方に参つて、幸右工門より直接聞かれたという、幸吉氏の母堂より直きく承つたのであります。

でその幸右工門なる人が、始終この宗右工門の処へ聴きに行つて、一緒に法を喜んで居られた。すると或時、一人の二十四輩の巡礼が宗右工門方に出て来て、どうか一晩泊めて貰いたいと頼み込んだ。で、その夜は宗右工門、幸右工門と巡礼と三人、おそくまで暖炉のそばで、色々お慈悲を話し合つて、その晩は大層喜んで眠りに入つた。さて翌朝、夜明け分に巡礼は目を醒すと、すぐ傍の壁の処に、宗右工門の一張羅の着物が掛けてある。巡礼はそれを見るなりふと盗心が起つて、手早くこれを笈の中に入れて、みんなの起き出ぬ先に、何気なき様で出て行つてしまふた。すると宗右工門は目を醒まして見ると、もう巡礼はいない。着物を盗まれたことには気もつかぬで

「さて／＼寝過して朝飯も喰べさせぬで立たせて仕舞うて残念だ」と、そう言いつゝ、そこらを見廻すと、巡礼の烟草入が落ちてある。

「あ、烟草入れを忘れて行つた。定めて不自由するであらう。一つ追い駆けて持つて行つてやろう」

念の時、この世の命終るのである故に
……もろ／＼の煩惱惡障を転じて、無生忍をさとらしめ
たまうなり。
茲をお知らせ下されたに外ならぬのであります。

九 妙好人宗右工門の話

ところでこの事は一体青年の方には分り易いが、老人の方でも實際問題の上から味わつて下さるとよく分る。老人でも家庭に於いてなど、随分苦勞があるのだから、その上より聞いて下さると能く分るのである。苦勞の段に於いては、青年老人の變りはないのであります。

そこで今私が『歎異鈔』の十三章にお知らせ下さる善惡の業報とのことは、如何にも私の善惡の業報である。しかるにこの者を飽くまで捨てぬとの本願一つで安心させて貰うのであることは、先き程より申した人生問題で聞いて下さると能く分る。併しここにも一つ妙好人の話で、私の常に喜ぶ話があるから、それをま一つ聞いて貰おうと思ひます。

それは定めて御承知でもあらうが、昔、越後の新井附近に、宗右工門なる、非常に有難い信者があつた。これがまことに感心な人で、其処へ信濃の飯山なる山本幸右工門一屋号を道具屋という。唯今の当主は幸吉氏と申して、その

と早速跡追うて出て見ると、巡礼はもうその辺に在る氣配もない。段々跡追うて行くと、漸くのこと、遙か向うの田圃の間に巡礼の後姿が見つかつた。そこで「おういおうい」と声の限り呼びかけると、どうしたことか、巡礼は、声かければかけるほど、後を振り反り／＼足を早めて遁げて行く。

こちらは訳が分らぬから、益々追い行きて頻りに呼び止める。巡礼の方は呼ばれ／＼呼ばるる程、一目散に通げてゆく。とうとう川の渡し場でせかれたものだから、仕方なく巡礼は止つた。

そこで宗右工門は追いついて、朝飯を喰べさせぬで立たせたことを断りを言ひ

「さてこの烟草入れをお前が忘れて行つたから、持つて来た。さあ持つて行け」と言つて烟草入を差出した。するとその時巡礼は眞赤な顔をしてうつむいて仕舞い、宗右工門に対して一言も、よう物を言わぬ。とうとう、こたえ切れなくなつて、笈の中より彼の着物を出し、

「実は貴方の宅を立つ時、つい出来心でこの着物を持つて来た。どうかこらえて下され」

するとこの時、宗右工門は、この着物を一目見るなり、

忽ち深く感じた様であつたが

「あゝ、そうであつたか。それはどうも、前世に於てお前に借りて置いたに違ひ無い。定めて長いこと借りて居たことであろう」

とつと袂を探りて一步銀を取り出し、その着物の上に載せ「これはわずかばかりであるが利息である。どうか一緒に取つて置いて呉れ」

と言つて差出した。

巡礼の方は、取つた上に利息まで遣らうというのである、益々びつくりして畏れ入り、平蜘蛛のようになつてあやまつた、宗右エ門の方は

「イヤこれは借りといふ物の利息である。そんなこと言わずに取つて置いてくれ」

と、斯う言うて頻りに先方へ渡そうとしたという話である。私はこの話を聞いた時、若しやこれが宗右エ門が、務め心でやつたものなら何の価もない偽善である。所謂盗人にお金を遣るといふものである。けれども今、宗右エ門のは

「実際に借りといふ物に違ひ無い、定めて長いことを借りて居たことであろう。これは僅かばかりであるが、その間の利息である」

と、無理押し付けにその一分銀を押つ付け、後をも見せずに

「イヤ、夫れは言うな。如何にもお前の言う通り二十四輩廻りする程の人であるからそんな心の起つて来ぬ方が当り前じや。それに現にそんな心が起つて来たというが寧ろ不思議なのじや。それは向うが前生に於いてわしに貸して置いたもの故、向うの人は取り返えさんならんし、わしは取られんならん因縁が具わつて居たから、何程喜んで居てもそんな心が出て来るのじや。故にそれは決して言うべきことでない」

と、斯う言うたという話なのであります。

私はこれを聞くまで、どうも『歎異鈔』の十三章は、はつきり分らなんだ。親鸞聖人は人を千人殺すのも業報であるとは、随分ひどい。これは唯四房が、しぶとい奴故、その唯四房をびつくりさそうと思つて、斯う仰言つたのだ。唯四房が、悪い／＼と何時までも言うてるもの故、その唯四に気をつけすために、こんな喻を仰言つたもので、斯うばかり思つて居た。が中々然うではなかつたのである。即ち我々は人を千人殺そうと思つても、殺すべき業報が無ければ、殺されぬし、その代りには、業報が来れば殺すこともあるのである。即ち善きも悪しきも、我々には業報の爲し業であるが、その業報任せであるのが決してよいので無いのである。然るに今は、その何処までも業報の身であるが哀れ可哀想とあるお心である。一寸言葉を取り

どん／＼遁げ帰つたというのであります。

十 業報の身が捨て置けぬとて

そこで巡礼は仕方が無いから、自分の罪を懺悔して、「どうか済まぬから返してくれ」と、その着物と一步銀を渡し守に托して立つて行つた。そこで渡し守は、夕方になつてその着物と一步銀を携えて

「巡礼も恐れ入りて、貴方に返して置いてくれと言つて立つて行つたから、これは貴方のものだから取つて置きなされ」

と言つて、宗右エ門方へ持つて来た。すると宗右エ門は見なかり、いやな顔をして

「あゝ、またもどつて来たか、まだ前世の業がつきぬのか」と、斯くつぶやきつつ、終にその着物を売り払つて金に代へ、一步銀をもつて、寺へ持つて行つて上げて仕舞うた。渡し守は、つくづく感心して、あとにて宗右エ門に言うようには、

「貴方の遣り方の感心なのは今更で無いから分るが、分らぬのは彼の巡礼の仕業である。聞けば前夜みんな非常に喜んだという話であるのにそれが朝になると、貴方の物を盗むというような心が起つて来るといふは、とんと分らぬ。一体これはどうしたものだろう」

斯う云つて聞くと、この時宗右エ門が言うようには、

て言うならば、設令自分が物取られても、あゝ可哀想に、前生の業報と、一点それに不足を思わぬ宗右エ門の心に、直ぐ弥陀の本願が現われてあると思つてあります。故に私共はこの本願の深きに遇つて貰つてみると、私共が斯程まで見捨てられぬと仰言つて下さる本願のお慈悲である。故に私共に於いては、

弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ。

と、即ち何処までもこの私の業のために現われて、その業の者故、助けてやらすば居られぬと仰言つて下さる処のお慈悲なのである。そこになると、私共の業報の強きよりも、仏の本願のお力の方が強い。故にまた『和讃』には、

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず
仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず

と。そこで先の人生問題と同じであつて、私共は「あれも業報じや。これも前世の約束じや」と、業報任せで安心出来るのは無いのである。むしろ私共が斯く業報任せで苦しむより他に仕様の無い「故にその者が可哀想である。業報のままでは打ちやつて措ぬぞ」との、この遣る瀬ないお慈悲に遇つて貰うからこそ、この善悪の業報の外に仕様

のない身が、この御見捨てなきお慈悲一つで安心させて貰えるのであります。

故にこの頂いた味の上より言う時は、どうしても茲に迷いの断ち切られた味わいがあるのである。も一つと言うと、これは言い過ぎになるけれども、私の安心させて貰うた上より言う時は、

「この浅間しいのをそれ程まで思し召し下さるとは、何たる有難いお心であろう。こんな御真実に遇わして貰うた上は、もう自分は何も要らぬ。今まで斯程までの思し召しとは知らずして、彼是、善いと思ひの悪いのと思つたは、実に申訳なき間違いであつた」

と、ここで立派に今迄の放し得なかつた業報より、手が放せる所が出て来るのであります。故に『歎異鈔』に

聖人の仰せには、善惡の二つ総じてても存知せざるなり。そのゆえは如来の御ところに、よしと思召すほどに知りとおしたらばこそ、善きを知りたるにてあらめ、如来の悪しと思召すほどに知りとおしたらばこそ悪しさを知りたるにてあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにてはおわしますとこそ、仰せ候いしか。

遣る瀬なきお慈悲を聞かして貰う一念に「今迄善し悪し知

常観先生のお手紙

一、(大正八年八月二十日)

謹啓仕候。先達小林刀自宛、御葉書拝見仕、御愛児様痲痺より脳症に變じ、急遽御長逝被遊候由拜承、驚愕哀悼之至に不堪候。御両所様の御悲哀如何ばかりと御同情の念禁ずるあたはざる次第に奉存候。

実は不肖在京仕候につきては御不審の事と存候が、不肖も先月十六日已後、四国九州伝道に罷出、廿六日別府に於て急電に接し、東京に於て常聰(三男)脳膜炎との事にて帰京候次第に候。

幸に病症、腎盂膀胱炎たりし為、三十日三十一日の如きホトンド危篤の模様候ひしも、一命をとりとめ、爾後一進一退にて入院加療中に有之候。依之此際貴愛児の計に接し、一入哀悼痛惜の情に不堪、他人事とは存じ不申候。

かねてより御承知の如く煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界に候へば、人世の此の如く当てならぬこと、又之が為に哀離離苦の凡情実にするせなき有様を飽迄も悲憫まします大慈大願に御座候へば唯々此永劫不変の御親心を仰ぎ奉るばかりに御座候。

不肖嘗て長女夭折仕候節、枕前に読経して和讃を誦し、フ

り顔に言うて居たのが申訳けなき間違いであつた。善きにつけ悪しきにつけ、飽く迄まことならぬ私を、飽くまでお見捨てなさらぬ如来の御まこと一つであつたか」

と、ここで長の迷いを断ち切り、六趣四生の因亡し、果滅するのであります。

——教行信証の講話より——

福島政雄

ト弥陀観音大勢至大願のふねに乗じてぞ生死のうみにうかみつつ有情をよばうてのせたまふ。の一首を口に致し、如何にも我を濟度せんが為に此人生に生れ、亦寂を示したまふ。如来の使なり、仏の方便なり、我が為に知識なりと感じ候夢の世にあだにはかなき身をしれと

教へて帰る子は知識なりとの古歌身に泌み申候。

封入の少額、香儀御靈前に御供へ被下度候。早速御悔状相認可申答の処、日夜看護の為に彼是致居、延引の段申訳無之候。併昨今心配無之候間、左様御思召被下度候。小児科病院の事ナレハ昨今は、消化不良脳膜炎等にて死去の人、日々相継ぎ実に無常迅速の感に不堪候。呉々も御両所の御哀情綿々尽くる処無之事と奉察上候。先は御吊詞申陳度早々頓首

二十日 近角 常観

福島 政雄 殿

御輿 様

休暇前に参上の節は多大の御厚遇を蒙り乍ら宛名失念の為阿刀田君の方に合併して御礼申上候。其後貴書に接し竹風大兄御入信との事乍蔭喜入候。皆様へどちらも宜敷奉願

上候。

二、(同年九月二十八日)

拜啓仕候。先達和子様五七日御志、御惠贈奉謝候。早速御礼可申上、且当方の事柄も可申上筈に候処延引相成候。実は三男常聰儀別便申上候通り、宇津野病院に大に加療致候処、八月二十一日、退院帰家候処、二十六日午後九時五分入寂仕候次第に御座候。

先日御来示の御思召一々御尤と奉存候、かねて人世は夢幻の事も常々覚悟致居、又此子も親としては長命致、為法尽力可致様に思ふも、仏の御思召よりせば、一歳の命を以て親を濟度すべき如來御思召の下に、使として来てくれしものたることを初めて其時に至り感謝致候次第に候。命終の時、又三七日迄位は割合にあきらめ居候へども、四、五七日に至り、恩愛甚だちかたく、生死甚きがたく、真に愛執の念に駆られて追憶の情に不堪候。併之を仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と被仰候事と存候へば、益々御慈悲を仰がれ申候。

先日阿刀田君の御手紙を拝し、夏中皆々御病氣に候ひし由拜承、是亦一度御返事可申上筈の処、忌中彼是致居候次第、不悪御思召被下度候。嬰兒の事なれば御しらせも不申上次第に候へども右所感申述候。十月は六日より帰国十一日迄帰京可仕候、先は右迄、早々

福島 政 雄 殿

近角 常 観

阿刀田君へ別に手紙差出不申、亘布御伝へ下され度候以上二通は私の長女和子が生後二年八ヶ月で死去しました時、先生も御子様を亡くされて、その前後に賜つたお手紙であります。

阿刀田君とあるのは、当時二高の歴史教授で仏教に熱心であつた人。竹風大兄とあるは、有名な登張竹風氏で、二高のドイツ語教授で、ニイチエを熱心に紹介して居た人でありすが、此の年に常観先生の御縁で入信せられ、ニイチエは四十八才で精神病になつたが、自分は四十八才にして親鸞聖人の信仰に入つたと非常に喜んで居られました。

当時のことを追憶すれば、仙台求道会といふ会をつくつて、毎学期一度づつ常観先生をお迎へして三晩続けて御講話を拜聴し、二高の生徒も熱心に一緒に拜聴するといふ有様でありました。四十余年前のことでありすが、けれども、その時の感銘は今日なほ私の心に鮮かに追憶せられます。若かりし日に善知識に値ひ奉つたことが非常になつかしく忝く追懐せられるのであります。

昭和三十五年六月二十三日 福島 政 雄 記す

私の言いたいこと

近 角 真 観

註、この原稿は、北海道石炭鉱業連盟発行の『道鉱連』誌に、発表せられたものであります。炭労問題は現代日本にある深刻な問題で、炭労から離職する人々、更に九州地域の争議、等々、日々夜々に千変万化して激化されていく問題で、炭労よ何処に行くの聲が地にみちて居ります。この時、三菱芦別鉱業所にあつて、近角所長が、道鉱連の方々に訴えられた一文であります。編者。

『誰が』ではなく『何が』
正しいかが問題である

宗教は、生老病死、是非善悪の人生相對界に悩めるわれわれが、超越者の絶対愛、絶対真実に触れ「有為の奥山今日越えて、浅き夢見し酔ひもせず」の悟りに導かれ、この世にある限り相對界ながらも、なお相對五分五分の愛憎を超越し、同信同朋相倚り相助けて、人生に信界建現を行じ、彼岸に浄土を証すべきことを教えている。

小は夫婦、親子の家庭内の關係から、大は階級、国家

民族間の諸問題に至るまで、およそ人と人との關係である限り、この間の消息に変わりがあるはずはあるまい。比喩的になるが、自然科学と方法論、社会科学と哲学、芸術と美の概念、政治と倫理……との間に見られるような共通原理が、家族社会から国際社会に至るまでの人と人との關係に作用していることを悟るべきではあるまいか。

……平和的繁榮に至る途と、斗争的滅亡に至る途、相對五分五分の超克と、相對五分五分の恣行、いわく平和主義と斗争主義。

超越者の絶対愛、絶対真実に腹ふくれ、相對五分五分の愛憎を超越して、人生に信界の建現を示すとは、「誰が正しいか」の斗争を両者破滅に至るまで押しすすめることななく、「何が正しいか」の共通の場において、問題解決に取り組む悲願を意味するものといえよう。

三面記事を賑わす市井の哀歎から、労働問題、政治問

題、国際問題に至るまで、およそ人生問題の解決方途にこの両面があることを忘れてはなるまい。現代日本においてとくにしかりというべきではなからうか。

「九六〇年という時点と、日本国民という場において、われ／＼が生きていることを疑う者はあるまい。生きるということは、過去を受け継ぎ、将来を拓く、その正しさにおいて意義があると考える。しかりとせば、現状を直視して、もつと／＼深刻に反省すべき多くのことを持つべきであらう。

大人として……産業人として……鉦人として……その労使として……

昭和二十年、二・一ストの時、私の恩師、杉敏介先生は左の狂歌を物しておられる。

しののめにあらぬ昭和の曙に

（当年の勅題は「曙」なり）
全体全連ストは何事
スト騒ぎ、マツクの待つた一声に
全国民のストマツク無事。

当時、札幌事務所の勤労課長として、向陵記念祭の酒杯を他所に、徹宵声を呑んでゼネストの推移を見守つたこと

妙好人をきらつた源左の話

——おらがやあなもんの自覚——

辛 川 忠 雄

（一）
妙好人源左について、慈光誌上に特に拙稿を転載たまわりましたので、調子づいて、ついでにも一つ未発表の「源左の妙好人を嫌つた話」を語らせて頂く。

それは昭和三年の真夏のことであつたが、私が京都から夏休みで自坊に帰省しておる丁度その時、源左が山根からやつて来た。その頃、京都の仏教書店、顕道書院が『法の園』という信仰雑誌を毎月刊行しており、私はアルバイトでその編集を手伝わせて貰つた関係上、藤永清徹和上が、「新妙好人伝」を編集、同店から出版せられることになつたので、ぜひこの機会に、その昭和妙好人伝には、源左を紹介し度いと考へた。そこで

「源左さん。今度京都から妙好人伝がでるけえなあ、源左さんにも、のつて貰おうと思うだけだなあ」

と直談判に及んだわけである。ところが、めつたにいやと云つたことのない源左が

「そりや、いけませんわいな」

と、切り返してきた。切り返すと書いたが、正言その通

を今新に思い出すことである。

もはや戦後ではない。問題の解決はアイクに頼つても、フルシテヨフに頼んでも不可なのだ。解決の主人公は、まずわれわれ日本の労使であることを忘れてはなるまい。

日本に冠たる自然条件を持ちながら、なぜ「去るも地獄、残るも地獄」になるのであるか……考へさせられることである。

「誰が」ではなく、「何が」正しいかを追求するところに、おそらく問題解決の鍵があるのでなからうか。

「去るも極楽、残るも極楽」でありたい。否、あらしめねばならない。そこそが、われ／＼炭鉦労使の現代的信界建現であるのだ。

昭和三十五年五月三十一日、発行『道鉦連』より

りで、源左がはつきり、実ははつきり、ノウというのである。ちよつと意外な見事に私は驚きながら、

「なんでだいな」

と云うと、忘れもしない源左が、そのこぶ／＼した指の長い枯れ切つた両手を後にまわして、泥棒が縛られる真似をしながら、

「これだけんなあ。煩惱具足だけんなあ、何事であるだあ
分らぬだけえなあ」

と自督を述べるのであつた。彼は『慈光』六月号の所掲の通り、おらがやあなものの自覚に徹していた。片時、瞬時と云えども、煩惱具足の凡夫の自覚から浮き上つてはいなかつたのである。常照我の光明に射通された彼は、いつも、「おらがやあなもん」であつた。妙好人と聞いても、決して嬉しくないのである。そしてその名に値せぬ自己と、罪業の深さから、断じて浮き上らずに、心の底から「妙好人などとは、とんでもない」とばかり、

「まだのせられませぬ。生きとる間は不可ませぬ。そればかりはおことわり」

に及んだのであつた。

(一一)

そんなことがあつたりして、藤永和上の妙好人伝にはのせなかつたのであるが、時、あだかもその秋が、御大典で京都の街々は、奉祝に湧き返つておつたので、『法の園』においても、特集号を出して、私は忘れもせぬが、

『妙好人、源左を語るの記』

を二カ月連載したのである。これが妙好人という言葉で源左が語られて活字になつた最初ではないかと考へるのであるが、それはともかく、この源左との対談は、生前に彼の言葉が、彼の口を通して語られたものだけに、文章は幼稚でも、源左の人格を知るための重要な参考資料となるであらう。そこでこの雑誌は大切に保存しておつたのであるが、羽栗先生にもお借し申上げたり、願正寺の御任職にもみせたりするうちに紛失して仕舞い、柳宗悦先生が『妙好人因幡の源左』を出版せらるる時には、遂に見当らず、わたくし京都の顕道書院にお立寄り頂いたが、戦争後のあわただしきで、残念ながら雑誌が入手出来なかつた由である。

(一二)

ついでながら、先年も

「私は京都の者だが、この寺は源左さんが度々訪ねてきたそうだから、その源左の拜んだ仏さんなら私も拝みたい」

心の眞実

佐藤 強三郎

人生は更に至誠眞実はなけれど、その不実なる我等を飽くまで救わんずば止まぬという如来の真心徹到し来たりぬれば、ここにはじめて、眞実至誠の心を生ぜしめらるるのである。

(近角先生著、慈愛と眞実、第十節)

目次

第一篇	善人の嘆き
第一	善行の愉快
第二	恩を受けて苦しむ
第二篇	相對界の苦樂
第一	恩を施して苦しむ
第二	自分は悪人か
第三	返報を求むる心
第四	眞 仮 問 答
第五	白 米 二 俵
第六	仮 名 書
第七	自 棄 と 酒
第八	病床の仮名書
第三篇	意外な事
第一	良心の苦悩
第二	罪の告白

と云つて、このわが小庵を訪ねた人があつた。この時、この寺が、源左の御旧跡になつたことを知つて、その頃とみに有名になつた源左が、すでに人間離れのした、宗教上の天才として浮き上つてしまつた淋しさに襲われたのであるが、源左の偉大さは、いわゆる妙好人とか、最勝人とか、希有人とかと呼ばれる、生き仏さまとしての尊さからくるのでなくて、それは、飽くまで、凡愚底下の罪人の自覚に徹して生きぬいた愚禿の偉大さなのである。

西哲が「私が人よりえらいのは、私が馬鹿だということ、人より一番よく知つておることのためだ」とかと語つておるそうだが、源左の妙好人としての価値に、私が源左に、求道の悩みを訴えた時、

「人より悪いこの源左を、一番きつきに助けるの本願だ、^{けえ}、助からぬ人なしたがなあ——」

と淳々、訥々と語つて聞かせたこの一語に尽きることを、この機会に、更に附加しておきたいのである。

私は十一年病床の身故、源左について語りたことも多いが、おそらく果せそうにもないから、幸に、畏友花田兄の『慈光』に記録しておけば、ひよつと後日のお益にたぬものでもない、と、あえて、あくの強さは承知の上で、正直なわが『源左物語』をかき送つた次第である。読者の寛恕を乞う所以である。

昭和三十五年六月中旬稿す

第三	返金しても罪名は残る
第四	遺言状
第五	青年問答
第六	大小の三角形
第七	仏の子なり
第八	倅の立ち聞き
第九	自然の解決
第十	仏の慈悲
第十一	仏前の燈明
第四篇	花と実
第一	お前も横向いたな
第二	婚期の青年
第三	自殺しても解決せず
第四	善人なおもて往生をとぐ

いわんや悪人をや

第一編 善人の嘆き

第一 善行の愉快

或る小さな村に一軒の貧しい農家がありました。その主人は牛の様なむつとりとした正直者で、一生俵命に仿らなく事は村の評判でした。ですから田圃は少ない方でしたけれど、食べるには困りませんでした。そんな人の家にも不幸がやつてまいりました。

「或る年不作の上に働き手の妻が病氣になり飯米を売つて医者呼んだり、聞いた事もない様な外国の高い葉を買つたものですから、明日たべる米にも思案する様になつてしまいました。」

その貧しい農家は、村の一番南の端に在りましたが、北の端には村一番の金持で大きな屋根の農家がありました。この貧しい農家が困つて居る話は小さな村です。何となく助けてあげたいと思いましたが、自分達の生活で精一杯でしたので、どうする事も出来ませんでした。金持の農家の主人は、いつも良い事をして人に喜ばれている親切な人でしたから、その貧しい農家を助けてあげようと考えました。或る日、金持の農家の主人は、米を一俵かっいで、貧しい農家を訪れました。

「あなたの家は今非常に困つておいでになるといふ話をに行きました。」

しかし貧しい農家の主人は、前と同じ様に、一言もその事にふれず、只もく／＼として働いているだけでした。

金持の農家の主人は、彼の妻の病氣が、もつと良くなつてから話をしようと考えているのだらうと思ひました。

この様にして、二人は何も話さずに、又一ヶ月たつてしまいました。金持の農家の主人は、貧しい農家の妻が、もうすつかり良くなつたという話を聞いて、今度こそは、彼が何とか話をして、礼を言うだらうと、心算しく家を出ました。

二人はまた同じ道で会いましたけれど、ヤツパリ貧しい農家の主人は、いつもと少しも変らず、只挨拶をしたただけで通り過ぎてしまいました。そこで金持の農家の主人は、あの米を持つて行つてから、もう二ヶ月以上にもなるのに、毎日々々会つて居ながら、一言の礼も云わない。全く呆れた変な奴だと氣になりました。そうなるに、金持の農家の主人は、貧しい農家の主人の牛の様なムツツリとした、無表情な、真黒い顔を見れば見る程シヤバシヤバとわつてきました。

その年の秋は、村全体が豊作でした。その貧しい農家でも、例年になく豊作で、妻も元氣に働きましたから、米は沢山とれました。

さきました。私は本当にお氣の毒に思い、米を少し持参しました。これは家に余つて居るものですから、何の御心配もなく食べて下さい。」

と丁寧に慰問しました。貧しい農家の主人は心から、「ありがと御座います。」

と感謝しました。たつた、一言でしかたけれど、この貧しい無口の農家の主人としては、精一杯の表現だったので。

金持の農家の主人は、暖いお天道様の光を心よく背に感じながら、森の細い一本道をたのしそりに歩いて居ました。「今日はホントに良い事をした。良い事をした後は氣持の良いものだ」と考え、よろこんで居ました。

貧しい農家の田圃と金持の田圃は隣り同志でしたので、毎日／＼二人は顔を合せてみました。

一日目は、ただお互に挨拶しただけでした。けれど二人の氣持はなごやかでした。二日目も同じでした。そして、その翌日も、翌々日も、貧しい農家の主人は、前と同じ様に、ムツツリとして、もく／＼として働いて居るだけでした。こうして一ヶ月経ちました。金持の農家の主人は、貧しい農家の妻が、段々病氣が良くなつて、元氣になつてきたという話をさきました。

その次の日、金持の農家の主人は、今日こそ貧しい農家の主人が、妻のその話をして礼をいうだらうと思つて田圃

金持の農家の主人は、貧しい農家の収穫が、食扶持をさし引いても相当余る筈だといふ事を知つていました。それなのに一粒の米の返礼はおろか、一言の感謝もない、とスツカリ憤慨して、その事ばかりを氣にかけて暮しましたから、心は荒波の様に満たされませんでした。

第二 恩を受けて苦しむ

ある日とうとう我慢しきれず隣家の人に貧しい農家の悪口を言いました。返礼もしない、恩知らずだ、と罵りました。けれども、悪口を言つて見ても、金持の農家の主人の心はやはり、満たされませんでした。隣家の人は貧しい農家を訪れこの話をして帰つて行きました。

貧しい農家の主人は口にくそ出しましたが、良い人でしたから、一日たりともその恩を忘れては居なかつたのでした。毎日の平凡な無言の挨拶の中に、貧しい農家の主人の本當の感謝の氣持が籠められていたのです。然しこの悪口を聞いてから、貧しい農家の主人は

「そうか、あの親切は、その親切だったのか。返礼を求めた親切だったのか。自分は何と野呂間、馬鹿だったのだらう。そんな安っぽい親切に、真剣になつて感謝をしてきたのが口惜しい、残念だ。」

と思ひました。それから又、毎日の様に同じ道で二人は遭ひ、いつもの

様に挨拶をしました。貧しい農家の主人の心は、前と同じではありませんでした。二人の心は、水と油の様にへだたつてしまいました。

とうとう時の経つに従つて此の二人はお辞儀もしなくなつてしまいました。金持の農家の主人は心に強く思い続けました。

「礼を言つて貰いたい、米を返礼に貰いたい、などという氣持で、贈つたのではないが、今年に貧しい農家も非常な豊作で、米も大分余分がある筈だ。普通の人ならば、穫れた米の内、一等良い米を持参して昨年はありがとう御座いました。お陰で、飯米に困らず、病人もよくなりました。厚く感謝致します」と言つて礼に来るのが当り前である。然るに、あの奴はどうだ。途中で遭つても、お辞儀もしない。自分も前に礼はいらぬ、と云つた手前、礼の催促をすも今更出来ない。さればと言つて、彼奴の礼を云わぬのが頼にさわる。忘れようとしても、どうしても忘れる事が出来ぬ。かくて、二年、三年、五年を経るにしたがい、彼奴は何事も知らぬかの様に平氣でいるが、自分は一日といえども平氣で居れない。こんな無礼の奴が、世に在るであろうか。こんな馬鹿な目に遭つて居る者は、自分外にはないだろう。実に彼奴はいま／＼しい奴だ」

かくて、七年と続き、遂には

ん。六十歳にもなつて……」

「そうですか、珍らしい事を聞けば聞くものだ。金持で、元氣者で、親切なあなたがね……」

と急に真顔になつて善兵衛の顔をのぞき込んで、しばらく考へて居たが、

「然し長い人生には色々な事がある。実に思いがけぬ事に突當つて驚く事がある。晴天の霹靂という諺もある程だ」

と云う。それを聞いて善兵衛はしげしげと顔を見返した。「本当にそうだ、近頃は急に心が腐つて、居ても立つても居られぬほどだ。つまらぬことだ」

といかにもじり／＼して氣が落着かぬ様子なので、信哉は、げげんな風にしげ／＼と善兵衛を見た。いつも上手に金儲をした内証話をきかせては愉快にから／＼と笑つた勝氣な元氣者の彼が、これは又どうしたことかと思つた。「実は、」と善兵衛は病氣見舞に捨吉へ米をやつた話を、なが／＼として、

「あなただから云うのだが、長生きすれば恥多しとか、本当に、折角氣持ちのよい一生を送ろうと、人に親切をたくして来て、拳句の果にこんな事になろうとは……」と下を向いた。信哉は実に真面目に坐り直して、おそろしい目付をして、一言も聞きもすまいこ、猫が鼠を捕る様な姿勢できき入つた、しばらくして、

「こんな氣持のわるい事はない。彼奴のお陰で一日といえども面白い事はない。自分も老年になつて居る、いつ死ぬかわからぬ。一生馬鹿な目にあつて終るのか。これを思えば死んでも死に切れぬ。実に腹が立つて／＼どうにも身のやり場がない。これ一つが黄泉路の障りである」

と金持の農家の主人は苦悶するに至りました。

オ二篇 相對界の苦樂

第一 恩を施して苦しむ

金持の農家の主人善兵衛は近頃何を見ても面白くない。そんな或る日。信哉が久し振りに突然訪ねて来た。信哉は氣の置けない人なので、退屈しのぎにもなるからと、喜んで迎えた。こちらから話さなければ、人の事を根掘り葉掘りききもしなければ、かれこれと人の悪口をいうこともしない、まことに氣楽な人である。

「久し振りですね、あれから何年位になりますか」と善兵衛が話しかければ、

「あれから五年です。長い様でも過ぎて見れば短いものですなあ、私もそろ／＼老人の仲間入りをしましたよ」と四方山の話に余念がない。そのうち善兵衛は

「この年になつて、私は思いがけぬ事にぶつかつて、近頃はあまり面白い事もなく、生きて居てもつまりませ

「それはいかにも残念でしょう。その人はひどい人です、本当に憎いでしよう。しかしそれ以来、人に親切が出来ますか病氣見舞に何か持つて行つてやる事がありませんか」

と聞いた。善兵衛はムツとして

「誰が行くのですか。やるものですか。あれからは、通り一べんの見舞はつきあいたからやりませんが、それも貰つた人に、貰つただけしかやりません。馬鹿々々しいから下手な親切なんかやめました」

「そうですか、それはそうでしょう。だれもそうだからね……」

そこへ暫く振りだといふので家人は名物の柿やら甘茶やらを運んできてなした。

「いつも木で熟した柿の味はまた格別だ。これは昔のユーヒーだつたでしょう」

と好きな甘茶をのんだ。山雀、小雀が飛んでいる。梅もどきの赤い実がいつぱいなつて居る。善兵衛は

「どうぞくつろいで、今日はゆつくりして下さい」といふ。信哉は足を崩さず、キチンと座つて、大いに考へ込んで居る。そして遂に口をきつた。

「人は親切をしても、その相手が感謝しないからといつて、その人を憎むというのは、それは本当の親切でしょ

うか。」

といかにも言いにくそうに、しかも力強くハッキリと言った。善兵衛はそれを聞くなり、ギクリと感じた。それから座が白けて、何となく奥歯に物がはさまつた様に、なんでもなごやかに話が出来なくなつてしまつた。柿を食べ、紅葉を眺めて、しばらくは気の抜けた雑談を交わしていたが、主人が何となく窮屈そうなので、信哉は

「大分失礼なことを申ししたが、どうか良く考えて見て下さい」

と丁寧に挨拶をして帰つた。

善兵衛は後で考えた。ひどい事を云う。人をつかまえて「お前は本当に親切でやつたのかとは」……然しあれから良く考えてみたが、自分は現に相手を毎日憎んでいる。死んでもそれを帳消しには出来ぬ、死んでも死に切れぬと怒つているじやないか。これが扱りの炎でなくて何であらう。炎にあえば人は焦げる。そうだ、自分はその人に親切をしたために余計あの人を憎んでいるのだ。この憎む心が、自分を苦しめ、人をも苦しめるのだ。この恐ろしい心を直さなくてはならぬ。こんな事が、色々思い出されて風も夜も心から離れない。

「自分も悪いが、相手の奴はなお悪い」とも思う。「然し自分が苦にして居るのだから、自分が直さなければ、自

分の苦からは抜けられない」……「こんな悪い心で居る事は、人は話さねば知らぬであろうが、神や、仏は言わずとも解つて居る筈である。人はいざ知らず、神や佛に向つてあやまらなくてはすまぬ、そうしなければ浮かばれぬ」と一人で思案を続けた。

それから時々、村や町にある講演会に出ては、名士の話を注意してきいた。「人は良くしなければならぬ。悪いと知つたならば、止めなければならぬ」という話である。いかにも尤もである。この憎む心を無くしようとするが、どうしても無くすることが出来ない。

今迄はあの貧乏な捨吉ばかりを悪い奴だ、恩知らず奴、とばかり恨んで来たが、憎んで来たが、自分はどうだ。こんな心の自分はチツトも善人でなかつたのだ。捨吉は自分が貧しい農家の者だという事を良く知つているから、いつもく／＼人に遠慮している。世の中へ出しやばる様なことはない。それにくらべて自分はどうか。学務委員、区長、村会議員、村長、だといつて威張つて来た。今になつて見れば、当時新聞に『善兵衛の善行』という見出しで出たのが恥ずかしい。

先日も医者へ行こうとあの一本道を歩いていると、向うから捨吉が来る。田圃へ行くのだから。道は一筋だ、逃げたくも逃げ様がない。敵に後を見せるのも癪だ。とう／＼

「そうか、そんな話があるのか。此の村では私が一番たつて、まあ、それは確かにそうだなあ」

と言えは倅は

「表彰するなら、お前の外に誰があるか。数多の善行がある。誰の眼にもくるとはいはない。前祝いだ、わしの家で一杯やりましょう。これから一緒に行く」

としきりに勧める。善兵衛はニコ／＼として

「さあそれじゃ、直ぐに、……」

と言いかけて、立とうとしたが、何となく沈んだ顔で「やつぱりよそう。腹の具合が良くないから、折角だけれど……」

と、とう／＼前祝いにも行かず、家で考え込んで了つた。自分は人に会えば虚勢を張つて、こんな弱虫になつた自分を他人に見やぶられまいと、りきんでは見るが、「お前は本当の親切者か」という信哉の一言を想い出すと、亀の子の様に首を縮めて固くなつてしまふ。こんなみじめな、弱くなつた自分がうらめしい。

信哉は遠くの村へ行つてしまつた。訪ねて行く元氣もない。

正面にぶつかつてしまつた。行違いに捨吉を見て思わずニコツと笑つて「ヤア」と挨拶した。捨吉はポカンとしてこ

ちらを見たが、行過ぎてから振り返つて頭を下げた。あれから捨吉に会うのがいやでく／＼仕様がな、あんな貧乏な、無学な、つまらぬ捨吉に負けた様な気がして、口惜しくて仕様がな。捨吉は一体どう思つて居るのだろう。それから医者通いするにも捨吉に会わぬ様に色々気を配つて出た。面白くないからいつも家にはかり引込んで居る。頭が痛くて、胃が変で飯がまずい。

噫、昔、捨吉が困つた時に、米を一俵見舞に持つて行つた道も、この道である。あの時の帰りにはお天道さまの光りを背にうけて、本当に良い気持であつた。意気揚々、鼻唄を歌い、愉快を満喫して、まるで極楽に居るようであつた。それが今、捨吉にかくれて歩くとは何事であるか。ホントに情無い話だ。

休日に分家の倅が善兵衛を訪ねて来て

「今度、村役場で、お前を村一番の善行者として表彰する」という話だが、私は一門の名誉として、こんな嬉しい事はない。何処へ出ても肩身が広い。是非表彰して貰う様に取計つて下さい、と昨日区長に運動して来た。今回は前より一層デカ／＼と新聞に出ますよ。早く見たいな」とと嬉しそである。それを聞いて善兵衛はニコ／＼して

あとがき

八月は近角常音先生の御忌日を迎え、とおいつ温容、慈語を想い浮べお育てを蒙つて居ります。

おしえおきて入りにし月のなかりせばいかで心を西にかけまし 金葉集

和雅の音を出して居るとききます。この鳥はこの世界では二つの頭が互に争い合つて亡んで行くほかにないのではありませんが、仏力に住持せられて和ぎ歌うのであります。△幸川ゆんの「源左」物語は、誠に脚下を深く省みさせて下さる実録であります。ようお知らせ下さいました。

△「心と真実」の佐藤強三郎様の原稿は、目次にありますように数回に分けて頂きます。人間五分五分の相対心と、それが仏の御真実に遭うよろこびを刻明に知らさせて下さいますことでもあります。

御味読下さい。

筆者の御住所

- 東京都世田谷区上北沢三丁目一三二二 福島政雄
- 北海道芦別市上芦別町ひぐらし社宅 近角真観
- 鳥取県八頭郡用瀬町正覚寺 辛川忠雄
- 新潟市関屋堀割三ノ十一番地 佐藤強三郎

△「横超の直道」に関する近角常観先生の御講説には、先回も驚喜されて法信を頂いた方々もありました。先生の御講話の何処にも、ここひとつ、というところがありまして、その何処からでも仏法の堂奥を教えられます。こうした御教を頂けません。後、後に生れた者の幸慶と存じます。

△近角先生のお手紙は、福島先生の御長女和子様のお亡くなりなされた時の御法信であります。蓮如上人の帖外御文の第十六通目の、見玉尼(上人の第四子)往生を誌された御文と呼応する感がいたします。

△私の言いたいこと、の近角真観様の御原稿は、目下の炭労働問題の渦中にあられての信の上からの雄叫びであり、襟を正さしめられます。「誰が」ではなく「何が」正しいかが問題である、そこに労使共通の広場がひらけることで、その根底に仏の御真実の存することを教えられます。其命の鳥が浄土においてはガリヨウビンガの鳥と共に

前号、唯信鈔意訳の慈光は三百冊ほど余分に印刷いたしましたので、御入用の方は御知らせ下さいお送りいたします。代金は切手封入で結構であります。

慈光社

御案内

毎月第一、二、三日曜日午後一時半、日曜例会。一道会館。市電、新郊通一丁目下車、東一丁半。

毎月廿四日、午前、午後。昭和区小椋町教西寺、法話会。市電御器所通下車。桜花学園東北筋

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区新上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市南区新上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番